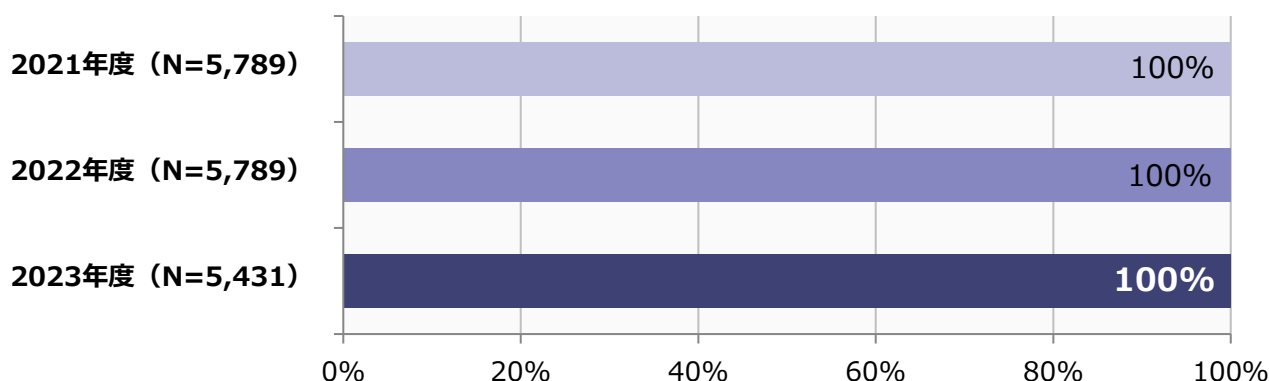


細胞診標本のダブルチェック

病理診断の重要な分野である細胞診断における精度管理の状況を示す指標であります。この指標の高い数値を維持することは、単に診断報告書の精度の向上だけではなく、検体の採取、標本作製、鏡検、報告、報告書の管理や病理組織診断の整合性の検証も含め一連の細胞診業務が複数の専門家の相互確認により的確に実施されていることを意味します。当院の病理診断科は日本臨床細胞学会の細胞検査士認定精度また細胞診専門医制度において、それぞれ日本臨床細胞学会認定施設および教育研修施設になっており、これらの認定更新のために定期的に業務内容の確認、資格保持者の維持や技量の向上に関する取り組み、そして外部サーベイランスへの参加を継続しています。適切に検査室の運営、精度管理が維持され、また教育研修活動も重視されていることを担保する指標と言えます。



当院値の定義・算出方法

分子： 細胞診を実施した件数

分母： 細胞診標本を2名以上の細胞検査士あるいは細胞診専門医が鏡検したのちに最終報告を行った件数

$\times 100 (\%)$

※グラフ中のN数は分母の値を示している。

結果の考察と今後の取り組み

細胞診断業務は順調かつ適正に遂行されていると言えます。当院での細胞診は疾患の精査のための診査細胞診であることが多く、スクリーニング検査以上に病因病態に関する情報を抽出し、あるいは臨床情報、組織診断との整合性もはかっていく上でより高い精度が求められます。年間に処理すべき検体数も多く、練度の高い複数の細胞検査士が業務に携わる必要があり、各診療領域、とくに腫瘍診断学、治療学の進歩に対応するためにも普段からの研鑽が欠かせません。あわせて最終診断をおこなう細胞診専門医との連携の上、タイムリーに的確な細胞診情報を臨床現場に還元できるように努めています。臨床検査室で検体採取現場において適切な検体採取状況を確認するROSE(rapid on-site evaluation)の件数も多く、高い技量を有する複数の細胞検査士の存在においてはじめて成り立つ業務ではあります。近年は細胞診検体から得たらがん遺伝子検査の情報が治療にも反映される時代となり、高い診断能力や検体のハンドリングに関する技量を磨くためにも、検査学会、臨床細胞学会等での講習等での生涯学習の機会を含め、技師、医師ともに細胞診業務の維持、向上をはかっていく必要があります。

文責：病理診断科主任部長
加藤 誠也